

看護系大学生の進路選択と履修経験に関する予備調査

倉元直樹^{1)*}, 小山田信子²⁾, 吉沢豊予子²⁾

1) 東北大学高等教育開発推進センター, 2) 東北大学大学院医学系研究科

1. 問題

わが国の医療系専門職の養成システムの中で、看護系専門職は他の職種とは大きく異なる特徴がある。それは、看護師の資格取得に至るまでに実に様々な経路が用意されていることである。大別すると、准看護師を経てから看護師の資格を取得するルートと直接看護師の資格を取得するルートに分かれる。准看護師を経て看護師資格を取得するには、都道府県知事の免許である准看護師資格を取得してから3年以上の実務経験を経て、二年制の看護師養成所を修了して看護師国家試験を受験することになる。准看護師養成機関入学のための学歴要件は中学校卒業である。それに対して、准看護師を経ずに看護師国家試験受験資格を獲得するには、三年課程の看護師養成所¹⁾が伝統的に最も一般的であったが、それ以外に三年制の短期大学、四年制大学がある。五年一貫の専攻科を持つ高等学校を例外として、看護師養成機関への入学は高等学校卒業が要件となっている。

近年の変化としては、准看護師を経由した二年制の養成所や短期大学のルートが急激に細くなってきたのに対し、四年制大学の看護学系の学部・学科や専攻²⁾による看護専門職業人の養成が急速に増えつつあることが指摘できる。すなわち、看護師養成の顕著な制度的変化のキーワードとしては「四大化」が挙げられる。

法制的には平成4(1992)年の「看護師等の人材確保の促進に関する法律(人材確保法)」の制定が看護系養成課程の四大化促進の契機と考えられている。平成4(1992)年には、看護系大学はわずか14校しか存在していなかった。ところが、平成20(2008)年には一気に10倍を超えて168校という数に膨れ上がった

(金澤・倉元・小山田・吉沢, 2010)。看護系大学の急速な拡大はその後も続き、平成23(2011)年度における一般社団法人日本看護系大学協議会の会員校はちょうど200校に達している。

井本(2009)によれば、わが国の看護師養成は学校教育体系の一環というよりも、歴史的に医療現場のニーズに応じて、需要者と供給者が一体となる自給自足的体制の下に行われてきたという特徴があるという。ところが、人材確保法の制定を契機に私立大学を中心とした四大化が推し進められたということは、看護系専門職業人養成を担う主体が、医師会や医療法人といった現場サイドから学校法人へと変化してきたことを意味する。すなわち、看護系専門職業人養成の問題について、医療現場の需給関係といった視点だけではなく、他の分野の人材養成と同じ学校教育の枠組みで捉えて行く必要性が生じたのである。看護系専門職業人養成の分野では、従来はさほど明確に意識されていなかった大学教育や高校教育の仕組みについて認識し、我が国の現在の学校教育システムの特徴や限界を踏まえた上で、教育実践の質の向上を考える必要性が生じてきたと思われる。特に、学生を送り出す下級学校という位置づけになる高校教育との関係性については、看護に関する基礎教育、および、専門教育の前提条件として何が求められるのか、より一層明確に意識せざるを得ない状況が現れつつある。

特に高校教育とのつながりが深いと思われる看護系大学の基礎教育における課題については、これまでそれぞれの実情に応じた問題点の指摘やそれを解決するための実践的な研究が盛んに行われてきた。入学してくる学生の資質という側面では、以前から進学動機

*) 連絡先: 〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内28 東北大学高等教育開発推進センター 高等教育開発部入試開発室 ntkuramt@m.tohoku.ac.jp

に関する問題が意識され、いくつかの研究が行われてきた（例えば、塩飽・小山田・庄子・渡邊・滝田・寺島・萩原・板垣・小林・杉山・佐藤・伊藤，1995；中谷・木戸・林，2006；竹本，2008）。最近では、高校教育との関連性をより意識した研究も現れ始めている。例えば、大久保・佐竹・大橋・佐居・伊藤・蜂ヶ崎・安ヶ平・石本・菱沼（2011）は看護学導入時期で学生が感じている困難を具体的に洗い出し、背景として「我が国の大学－高等学校教育の現状」などの問題点を上げた。さらに、伊東・大久保・佐竹・佐居・大橋・蜂ヶ崎・菱沼（2011）ではそのような学習上の困難を軽減するためのマニュアルを開発し、その実効性の評価を試みている。

その一方で、高校教育の制度的側面にアプローチする研究はまだ端緒についたばかりである。特に、高校以下の教育課程や大学入試制度との関連に注目した研究は、まだ数少ない。

看護系大学が、現状、抱える最も大きな困難としては、高校教育が文系と理系に大きく分かれていることが挙げられる。科目選択制が高度に進んだ高校の教育課程の下では、理系と文系の履修内容のギャップが非常に大きくなっている（例えば、荒井，2012）。柳井・石井（2007）は、柳井（2003）で実施された3万名以上の規模の学生調査、柳井他（2006）で実施された1万名以上の規模の大学教員調査から看護学系のデータを抜き出して、分析を行った。その結果、高校時代に学ぶ教科科目の中で特に大学教員から必要度が高いと認識された科目は「生物」「外国語」「国語」の順となっていた。すなわち、看護学は、学力基盤として理系、文系の双方の素養が必要な分野であり、元来、文理のいずれかの一分野として位置づけるのには無理があるという結果である。

そこで、金澤他（2010）は看護系大学167校における主要な入試区分で受験生に課されている科目に関して調査を行った。その結果、163校が以下のいずれかの型に分類可能であった。理系コースでなければ解答できない科目を課す「理系型」が12%、「文系型」が45%、理系型・文系型のいずれも選択できる「理系＋文系型」が12%、個別学力試験は行わないがセンター試験で理科2科目を課す「個別学科なし（理系）」が

12%、理科1科目の「個別学科なし（文系）」が20%、「面接・小論文のみ型」は0%という分布状況である。すなわち、看護系大学の入試は極めて多様に分かれており、典型的な入試科目のパターンが存在していない実態が浮き彫りとなった。看護系大学における教育の基礎となる学力基盤のイメージが統一的に描けていない状況である。

ところが、かつて、看護師養成機関の基礎学力は明確であった。理系科目を中心に、幅広い学力を基盤としていたのである。昭和41（1966）年の受験雑誌の記事を調査した金澤・倉元・小山田・吉沢（2011）によれば、入試科目が掲載されていた看護学校136校のうち、9割以上の学校で国語・数学・理科が課され、英語も8割以上で課されていた。すなわち、当時、全体として言えば、国語・数学・理科・英語の4教科入試が標準だったのである。

看護系大学に進学を考える受験生の立場から見たときには、かつては満遍なく勉強しなければいけないという意味では厳しい受験勉強が課せられていたと言えるかもしれない。それに対して、現在は受験勉強をしなければならない科目はさほど幅広くはないが、多くは高校1年生の相当に早い時期から将来の受験校を想定して、文系コースに進むか理系コースに進むかの進路選択をしなければならないという難しさがある。

2. 目的

以上のような状況を踏まえ、本研究では実際に看護系大学や専門学校に進学した学生が、どのような学習履歴を持ち、また、どのようなプロセスで進路決定をしているのか、といった問題について調査を行うことにした。なお、本稿では、約2,000名規模の本格的な質問紙調査を行うための前段階として実施した、二つの予備調査に関する報告を行う。

3. 調査1

調査1では、調査2で作成した質問紙を設計するための素材を収集することを目的として、看護系大学在学中の学生を対象に半構造化されたインタビュー調査を行った。

3.1 方法

3.1.1 倫理的配慮

東北大学大学院医学系研究科倫理委員会に調査計画を提出し、承認を受けた。調査協力者募集のためのポスターを作成し、自分の意思で応募した者のみをインタビュー調査の対象者とした。

3.1.2 調査対象者

調査対象者として、平成21（2009）年度に国立A大学の看護学系コースに在学中の学生をターゲットに協力者を募った。その結果、18名が調査への協力を申し出た。そのうち、本稿の分析に利用したのは15名分のデータである。インタビュー調査の実施時期は平成21（2009）年8月から平成22（2010）年2月までであった。

3.1.3 インタビュー調査の実施手続き

第2著者と第3著者、および、もう1名の調査協力者がインタビュアーとなり、半構造的、自由回答の方法によるインタビュー調査を行った。

調査の場所は、インタビュアーの研究室等、プライバシーが保護される環境であった。調査は1対1の対面式で行われ、時間は一人当たり平均20分程度を要した。

3.1.4 インタビュー調査の概要

以下のような半構造化された手続きに基づいて調査を行った。

1. 導入

調査対象者をリラックスさせると同時に、インタビュー調査の目的をきかいつまんで説明した。

2. 説明と同意

調査結果が個人の処遇に何らかの影響を及ぼすことはないこと、プライバシーが守られることなどを具体的に説明し、同意書へのサインを徴することで調査への協力意思を確認した。また、インタビュー内容を録音し、後に再生して分析することについても説明し、同意を得た。

3. インタビュー項目

各調査対象者に共通して尋ねた項目は以下の5項目である。

- 1) 進路を看護に決めた理由
- 2) 文系・理系のどちらと考えて、どのように科目履修をしてきたか。
- 3) A大学を選択した理由
- 4) 特定の入試区分を受験したか否か
- 5) A大学以外に受験した大学・学校

3.1.5 分析手続き

インタビュー終了後、録音されたデータはテープ起こしをし、テキスト化された。内容分析的手法を用いて、発話内容からその意味を文脈に沿って掘り下げて解釈することとした。発話内容から本研究のテーマに関連する部分が抽出され、同質なものがまとめられて「サブカテゴリー」に分類され、さらに「カテゴリー」として集約された。

なお、一人の調査協力者の発話の中に同一のサブカテゴリーに分類される内容が複数回現れた場合、重複して数えられている。

3.2 結果

進学した理由は、表1、表2のように2つに大別することができた。

表1は「A大学を選んだ理由」と解釈できるカテゴリーである。表中にサブカテゴリーの内容とそこに含まれる要素の種類、さらに出現頻度を示した。構造は比較的単純であり、理由としては「総合大学としてのA大学」であることの出現頻度が最も高かった。

表2は専攻として「看護を選んだ理由」に関わる内容である。表1と比較すると、多様性に富む内容が上がっていて、個人によって理由は様々であることがうかがえた。「進路としての看護の選択」に関する発話

表1. A大学を選んだ理由

カテゴリー	サブカテゴリー（種類）	頻度
1 家族・地元志向	本人の希望 (4)	21
	親の希望 (1)	
2 A大学であること	総合大学 (7)	38
3 オープンキャンパスに魅せられて	オープンキャンパス (4)	18
4 高校の意気込み	A大学が進学目標 (1)	7
5 学力の折り合い	学力が見合っていた (3)	14

表 2. 看護を選んだ理由

カテゴリー	サブカテゴリー (種類)	頻度
1 小さい頃からの看護師へのあこがれ	家族・本人の病気体験 (1)	27
	家族・親戚からの情報 (1)	
	小さい頃から (2)	
2 中学・高校の体験授業	出前授業 (1)	20
	体験授業 (3)	
3 進路としての看護の選択	調べた (1)	39
	医療系がいい (1)	
	高校に入って (1)	
	文系・理系 (1)	
4 学力との折り合い	医療系の中での関心 (1)	18
	学力との折り合い (4)	
5 適性・資格	資格 (1)	7
	家族 (1)	
	性格・気持ち (1)	

頻度が高いことが目立っている。

調査1の分析結果から、看護系大学への進路選択の経路としては、おおむね4種類程度の主要なパターンが識別できそうであることが分かった。

第1の類型は、幼少から看護職に憧れてきたタイプである。調査1の対象者の中では少数派であった。

第2の類型は、看護系への関心が中学・高校の進路学習の中で強化されてきたケースである。中等教育におけるキャリア教育の効果が確認された。

第3の類型は、大学進学が前提で、その中の学部学科選びとして、最終的に看護に行きついたケースがある。調査1では、この類型に分類される頻度が最も高かった。

第4の類型には、本来の志望は別だったが、学力的問題で妥協したケースが存在する。すなわち、必ずしも自ら望んで看護系の分野に入学したわけではない者である。

調査1の分析結果から、A大学においては大学への進学を前提とした進路探索の中で、看護系の分野が選択肢の一つと考えられる傾向が強いことが示唆された。ただし、全国の看護系大学の学生母集団全体を考えたとき、A大学の学生が特殊な集団である可能性は否定できない。

4. 調査 2

調査1の分析結果を受け、調査2が企画された。調査2は質問紙による大規模調査である。当初は予備調査を行って調査票を改善し、本調査を行う計画であった。しかし、完成した調査票の仕上がりが予想以上に良かったこと、当初の調査票で得られた予備調査のデータが想定以上に多かったことから方針を転換し、調査票の大幅改訂は実施しないこととなった。改訂によって分析可能なデータ数が限られてしまうよりも、より多くの調査データを分析に供することが可能になることを優先したためである。したがって、当初予定していた「本調査」では、一部の項目の表現を手直しすることに止めた。

調査対象の母集団についても、看護系大学との比較対象として看護系専門学校を含めることとした。なお、最終的に看護系専門学校に入学した者の中にも、看護系大学の進学を志したり、看護系大学を受験した経験を持つ者も相当数含まれていることが推測できる。

調査は継続中であるが、本稿では一部のデータについて分析を行った結果を報告する。

4.1 方法

4.1.1 倫理的配慮

東北大学高等教育開発推進センター倫理委員会に研究計画を提出し、承認を得るとともに、東北大学大学院医学系研究科倫理委員会にも質問紙調査の計画を提出し、承認を受けた。

4.1.2 調査対象者

平成22(2010)年度に看護系B専門学校に在籍していた1～2年生。

4.1.3 調査票

調査票は、回答者と実施者双方の便宜を図るために、A3判両面で収まる4ページとした。調査項目の概略は以下の通りである。

1) プロフィール

性別、居住形態、年齢、学年、専門、学校の種類、現浪、出身高校の設置者、出身高校の所在地(都道府県名)、高校時代の課程・コース・類型等。

2) 進学先の決定と入試

入学した入試区分、志願を決めた時期、他に受験した大学・専門学校、第1志望か否か、進学先として検討した分野、進学先の決定に最も影響力があった人物、現在の所属先に受験を決めた理由（5段階評定、20項目）。

3) 高校時代の学習履歴等

文系・理系に分かれた時期とその時の入試科目に関する知識、教科・科目の履修状況、もっと勉強しておけばよかった科目、看護は「理系」か「文系」か。

4) その他

適性度³⁾、オープンキャンパスへの参加経験、親しい間柄の医療関係者、将来の進路。

4.1.4 調査方法

授業時間内に口頭で調査の主旨を説明した。匿名であること、回答をもって調査への同意を得たとみなすことを説明した後、調査票を配布した。調査対象者は調査票を持ち帰って記入したのち、袋に入れて専用の回収箱に投函した。

4.2 結果

4.2.1 回答者属性

調査対象者数59名に対し、有効回答者数56名、回収率は95%であった。

学年別の内訳は、1年生、2年生ともに28名（50%）、現役が40名（75%）、浪人は0名（0%）、その他（社会人）が13名（25%）であった。高校時代に理系コースで学んだ者が30名（54%）。

4.2.2 進学先の決定と入試

他の学校、ないしは、大学を受験した者は29名（53%）、そのうち大学を受験した者は17名（63%）、所属校以外の専門学校を受験した者が17名（63%）であった。進路として看護系のみを考えていた者は32名（58%）であった。

志望校の決定に最も影響力があった人物は、親が13名（24%）、先生が6名（11%）、自分自身が33名（60%）、その他3名（5%）であった。

4.2.3 高校時代の学習履歴等

文系・理系に分かれた時期は、高校入学時が3名（5%）、高校2年進級時点が38名（68%）、高校3年進級時点が11名（20%）、文系・理系というコース分けがなかった者が3名（5%）、その他が1名（2%）であった。

看護は「文系」か「理系」かという問いに対しては、「理系」が33名（60%）、「文系」が3名（5%）、「どちらとも言えない」が19名（35%）と、「文系」と考える者は少なく、大半が「理系」、または、「どちらとも言えない」という回答であった。学年別の分析では、1年生では22名（81%）であったのに対し、2年生11名（39%）に止まった。1年生は圧倒的多数が「理系」と考えているのに対し、2年生では必ずしも「理系」とは感じていないという形で、著しい傾向の違いが見られた。

学習履歴に関しては、科目ごとに「履修していない」「履修したが、受験勉強はしていない」「受験勉強をした」という三つの選択肢から一つを選択する形式で尋ねた。そのうち、「受験勉強をした」と回答した者の比率を分析した結果は図1に示すとおりである。

「数学Ⅰ」「数学A」は90%以上が受験勉強をしていた。次いで、「英語Ⅰ」「国語（現代文）」は80%以上が受験勉強をしていた。したがって、「数学」、「英語」、「国語」といういわゆる主要3教科については、比較的基礎的な内容に関しては受験勉強の経験がある者がほとんどである。次いで「英語Ⅱ」が75%であったが、それ以外の科目は60%を割り込む結果となった。

「数学Ⅱ」と「生物Ⅰ」は59%が受験勉強の経験者であった。次いで「国語（古典）」、「数学B」が50%を超えていた。柳井・石井（2007）で必要度が高いとされていた「生物」「外国語」「国語」は大半の受験生が受験勉強を経験していたという結果だが、高い水準とは言えない。ちなみに、理系の範囲の「生物Ⅱ」の受験勉強経験者は29%に止まっている。「数学Ⅲ」「物理Ⅰ」は1名（2%）しか受験勉強の経験者がいないという結果であった。

それでは、専門学校のみを受験した者と大学も受験した者では受験勉強の科目に違いが見られるのだろうか。回答者の中に17名（30%）大学受験を経験した者

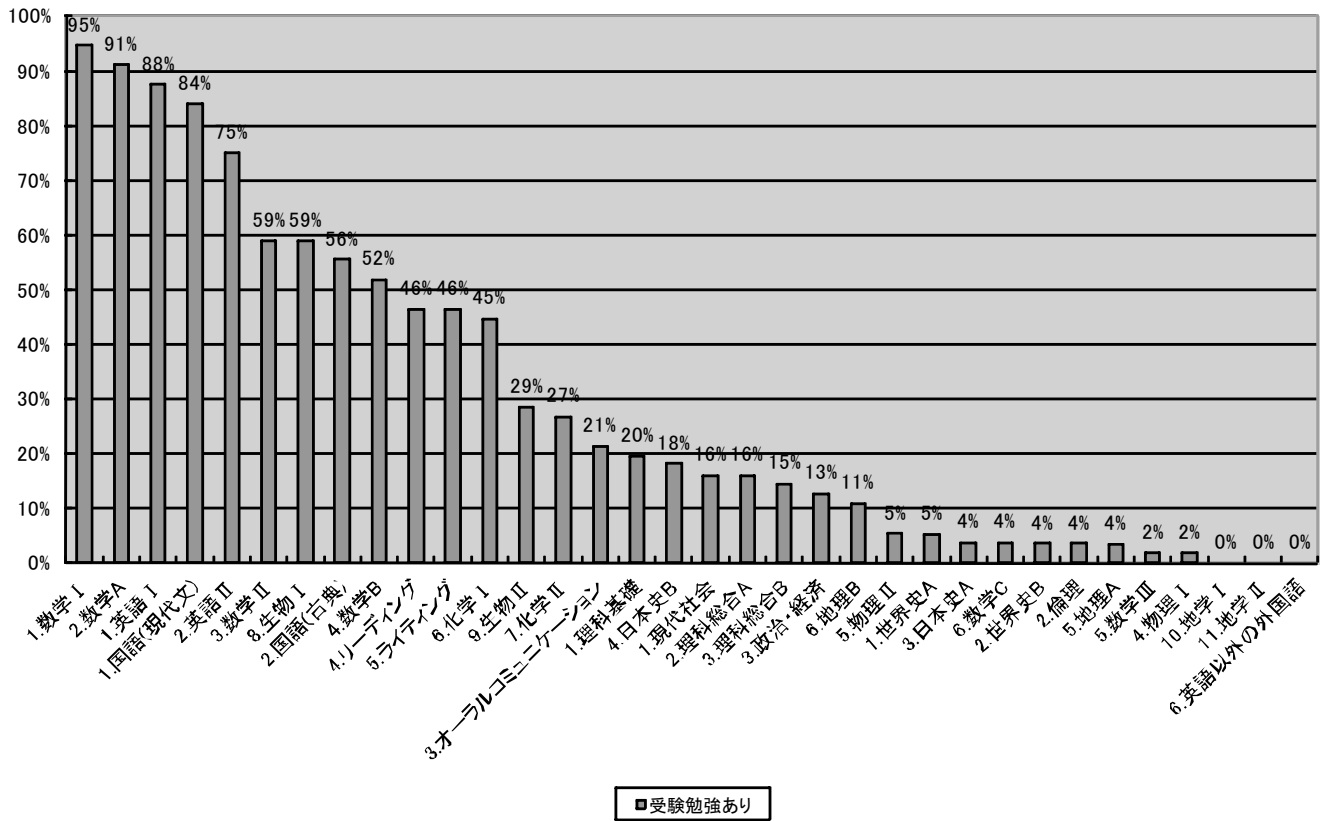


図 1. 受験勉強をした者の比率

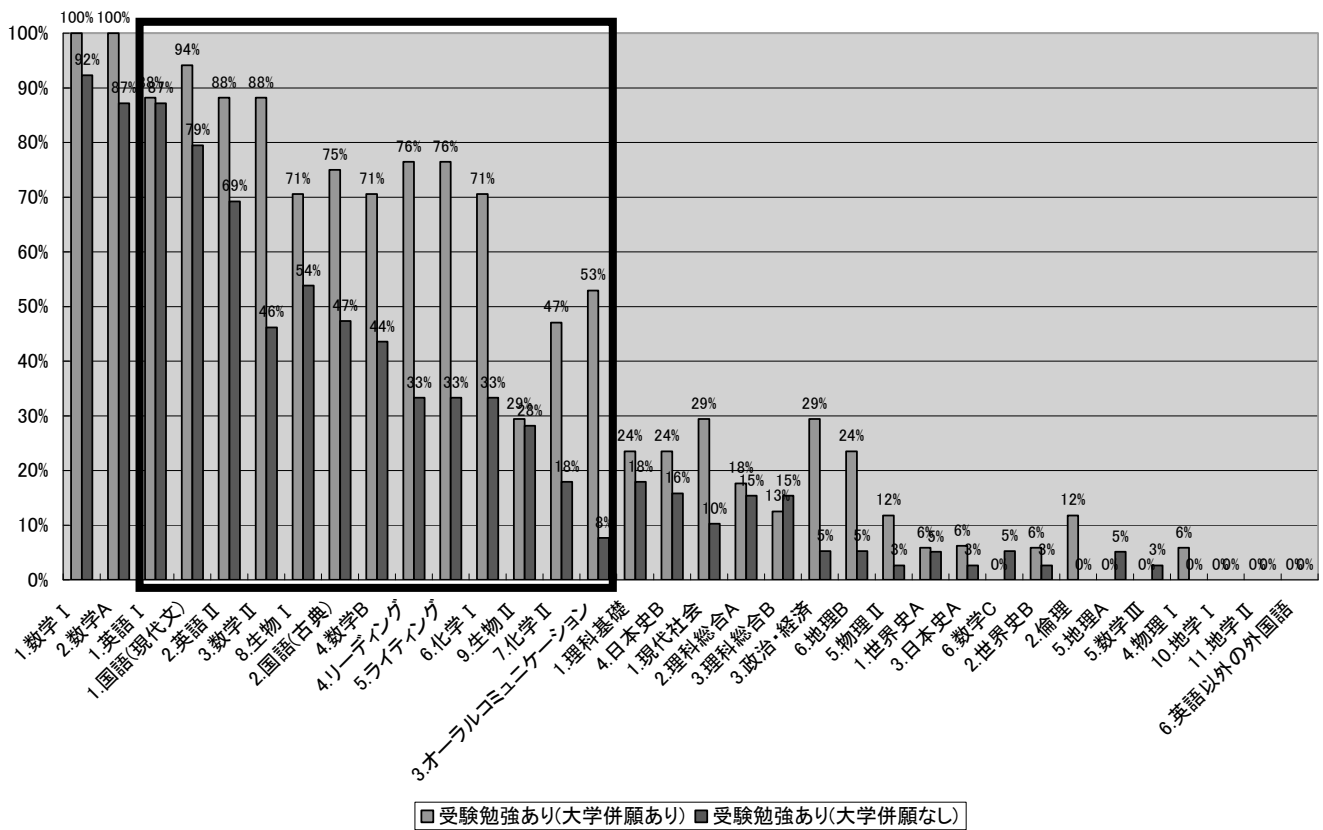


図 2. 受験勉強をした者の比率 (大学併願の有無による比較)

が存在したので、その17名を他の39名と比較した結果が図2である。

ほとんどの科目で大学併願者の方が受験勉強経験者の比率が高い。特に、「数学Ⅰ」「数学A」は全員が受験勉強の経験があった。

受験勉強経験者の比率に大きな差が付いたのは、おおむね枠で囲った範囲の科目である。国語では「古典(75%, 47%⁴⁾)」で差があった。数学では、大学受験経験者の方が「数学Ⅱ(88%, 45%)」「数学B(71%, 44%)」といった、より高学年で履修する高度な数学まで受験勉強を行っていた。ただし、理系の範囲となる「数学Ⅲ」「数学C」は大学併願者でも受験勉強経験者はほとんどいなかった。「英語」では「英語Ⅱ(88%, 69%)」「リーディング(76%, 33%)」「ライティング(76%, 33%)」「オーラルコミュニケーション(53%, 8%)」と、大学併願者の方がより高度な内容で広い範囲の受験勉強を行っていたことが分かった。理科では「生物Ⅰ(71%, 54%)」「化学Ⅰ(71%, 23%)」「化学Ⅱ(47%, 18%)」といったところで顕著な違いが見られた。

全体を通じて、B専門学校においては、最終的に専門学校に入学したとしても、大学への併願が受験勉強というレベルでの学習を随所で促している傾向が見られたと言えよう。

5. まとめ

本稿で行った「調査1」「調査2」とも、規模が著しく小さく、確たる結論を述べるにはデータが不足していると言わざるを得ない。しかしながら、ある程度の傾向から、今後の研究の進め方に対する見通しが得られたと言える。

「調査1」は国立A大学に通う学生を対象者としたインタビュー調査であった。幼少から看護系を志していた者は少なく、大学選び、ないしは、学部・学科選びの一つとして看護系に行きついたというのが典型的なケースであり、学力の制約から看護系で妥協した者も見られた。進路選択の上では中学、高校での進路学習の影響も大きかったように思われる。

「調査2」は「調査1」とは対照的にB専門学校に所属する学生を対象とした質問紙調査であった。専門

学校のみを進路として選択した場合には、受験勉強という形で濃密に勉強する教科・科目は限定される傾向にあり、大学を併願することによって学びの幅が広がる傾向が示唆された。しかしながら、それが一般的に言えることなのか、B専門学校に特有の傾向なのかという点に関しては、今後、様々な看護系大学、および、看護系専門学校で収集されたより多数のデータの分析が待たれるところである。

「調査1」と「調査2」は調査対象も調査方法も異なるため、単純に比較して述べることは難しいが、ある程度の課題が見えてきたことは事実である。すなわち、大学においては進路選択や志望の動機づけ、専門学校においては学力の水準と幅、という点が課題となりそうだということである。

本稿はあくまでも予備調査という位置づけなので、極めて粗い分析に終始した。現時点で、「調査2」で用いた質問票に対して約2,000件の回答が得られている。今後、十分な質と量のデータを多角的に分析することによって、より明確に看護専門職業人養成の基盤の持つ問題点を浮き彫りにすることが期待できるであろう。

付記

本研究は、東北大学高等教育開発推進センター長裁量経費「平成22年度高等教育の開発推進に関する調査・研究経費」の助成を受けた「医学部入試における選抜方法の研究(研究代表者 倉元直樹)」に基づく研究成果である。

注

- 1) 本稿では、「看護系専門学校」と表記する。
- 2) 本稿では、金澤・倉元・小山田・吉沢(2010)等にしがいが、「看護系大学」と表記する。
- 3) 高等教育学力調査研究会(2002)の項目を用いた。
- 4) 括弧の中の最初の数値が「大学を併願した者」、2番目の数値が「大学を併願しなかった者」の受験勉強経験者率を表す。

引用文献

- 荒井克弘 (2012). 「学習指導要領 vs. 大学入試—その葛藤の軌跡といま」東北大学高等教育開発推進センター編『高等学校学習指導要領 VS 大学入試』東北大学出版会, 7-37.
- 井本佳宏 (2009). 「看護師 —その自給自足的養成体制のゆくえ—」橋本鉦市編著『専門職養成の日本的構造』玉川大学出版部, 84-103.
- 伊藤美奈子・大久保暢子・佐竹澄子・佐居由美・大橋久美子・蜂ヶ崎令子・菱沼典子 (2011). 「看護学導入時期の学習上の困難の軽減をはかった教材の有用性」『聖路加看護学会誌』15 (2), 9-15.
- 金澤悠介・倉元直樹・小山田信子・吉沢豊予子 (2010). 「看護系大学の量的拡大に伴う大学入試設計の問題 - 実情把握のための基礎分析 -」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』5, 15-27.
- 金澤悠介・倉元直樹・小山田信子・吉沢豊予子 (2011). 「看護系大学の入試構造に見る高大接続問題」『大学入試研究ジャーナル』21, 49-57.
- 高等教育学力調査研究会 (2002). 『大学生の学習に対する意欲等に関する調査研究』平成12, 13年度文部科学省教育改革の推進のための総合的調査研究委託報告書 (研究代表者 柳井晴夫)
- 中谷信江・木戸久美子・林隆 (2006). 「山口県立大学看護学部学生の進学動機について」『山口県立大学看護学部紀要』10, 15-19.
- 大久保暢子・佐竹澄子・大橋久美子・佐居由美・伊藤美奈子・蜂ヶ崎令子・安ヶ平伸枝・石本亜希子・菱沼典子 (2011). 「看護学導入時期の学生が感じる困難性の検討」『聖路加看護学会誌』15 (1), 9-16.
- 塩飽仁・小山田信子・庄子由美・渡邊裕美・滝田永子・寺島美紀子・萩原晴美・板垣恵子・小林淳子・杉山敏子・佐藤八重子・伊藤尚子 (1995). 「高校生が看護職を志向する背景要因」『東北大学医療短期大学部紀要』4 (2), 185-192.
- 竹本由香里 (2008). 「看護学生の看護系大学への市医学志望動機の検討」『宮城大学看護学部紀要』11 (1), 13-20.
- 柳井晴夫 (2006). 『大学生の学習意欲と学力低下に関する実証的研究』平成15-17年度日本学術振興会科学研究費補助金研究成果報告書.
- 柳井晴夫・石井秀宗 (2007). 「看護系大学において必要とされる教科科目・資質能力・スキルに関する調査研究」『聖路加看護学会誌』11, 1-9.
- 柳井晴夫・椎名久美子・石井秀宗・野澤雄樹 (2003). 「大学生の学習意欲等に関する調査研究」『大学入試研究紀要』32, 57-126.